

社会の変化とNECの改革からみる将来の展望

社外取締役
瀬戸 薫



急速に拡大した新型コロナウイルス感染症により、世界の経済は大きな影響を受け、日本の将来を予測することも難しくなりました。人々の価値観や生活様式が大きく変化することが予想されます。その中でNECへの影響も懸念されますが、マイナス影響よりも、むしろこの変化がフォロワーの風となり、社会に大きな貢献ができるチャンスであるととらえています。

その背景には、長年にわたる事業構造の改革や人事面での改革などにより、企業文化が一新されつつあること、そして120年の間コツコツと技術を磨き、多様化し、深耕を続けてきた歴史があるからです。

加えて、優秀な経営幹部の招聘、社外取締役の数と質の充実など、社外の力を上手く取り込めたことも大きな要因だと考えています。経営の基礎となるガバナンスを強固にし、会社を強くしていくためには、外部からの視点が必須であり、非常に重要な要素となります。また、次世代の社長やそのさらに先を見据えて長期的な視点でサクセッションプランを作成していく必要もあります。具体的には社外取締役全員による、執行役員との面談を行っており、各人の能力や見識、人柄や倫理観などの評価を進めています。

このような取り組みを通じ、私はNECのさらなる成長と社会貢献といった将来の展望は明るいと考えています。

時代とともに進化する監査の実務

社外監査役
中田 順夫



NECの社外監査役に就任して1年になります。他社に比べ、NECの場合にはビジネスの内容が最先端の技術を駆使した難解なものであり、多数の事業部門と国内外の連結子会社からなる複雑な組織であることから、通常の監査のアプローチではなかなか太刀打ちできず、その分監査の方法もさまざまな工夫を重ね磨き上げられてきています。その1つが監査役、監査法人、内部監査部門の3つのチーム間での密接な協力関係です。

監査法人、内部監査部門と意見交換をする中で、新型コロナウイルス感染症の拡大以降の監査の姿が話題に上がりました。日々の業務執行の場でのリモートでの業務遂行は予想以上に効率的な反面、ピンポイントの議題のみに議論や発想が集中しがちになり、また作業の過程でのケアレスミスがチームメンバー間で見過ごされやすいので、それを念頭に置いた監査が必要になります。また、監査も事業部や子

会社の現場に赴いての実査の機会が限られリモートでの聴取が増えるため、従来の幅広い知識と人間関係に基づく経験と勘による監査だけでなく、それを補うものとしてデジタル監査の活用が模索されています。デジタル監査のうち代表的なものは、経理不正や不採算プロジェクトのリスクを財務データの分析から系統的に早期に割り出すものです。デジタル監査はすでに導入が進んでいますが、さらに推進・高度化していくためには、会社ごとの業務の特色やリスクの所在に応じてリスク検出の精度を上げていくことが求められます。経験と勘による危険領域のサンプルチェックの重要性は変わりませんが、システムにより網羅的にリスクの所在を検出する方法との併用は、間違いなく監査の精度を高めることになると思われ、今後の発展が期待されます。

引き続き社外監査役として、NECのガバナンス向上に貢献していく所存ですので、宜しく申し上げます。